

昭和二十四年七月二十三日第
行（毎月一回・十五日発行）可

（通第三四三号）

慈光

第三十卷

第一号

次

四海兄弟と同一念仏……………近角常觀……②
新春の所惑……………柳瀬留治……⑧

目　　念

歎異抄のすすめ（二）……………田村実造……⑩
生命追求への遊び……………川畑愛義……⑭
抄……………木村無相……⑯
想……………花田正夫……⑯

隨

感

隨

第三十卷を迎えて

花田正夫

孔夫子は「三十にして立つ」と申しましたが、人生も三十になると自分の為すべき方向、目的も定まり、生活も落着いてくるものであります。さて『慈光』も第三十巻を迎えまして、省みますと、この年月、沢山の先生方や、誌友にはげまされ、護念されて、声なき声に導かれながら、その月、その月だけを考え考へていつの間にか三十年が過ぎたのであります。その間、一番めぐまれるのは私自身で、原稿を読み、校正し、味い、そして発送させて貰いますので、おいしいところを先ず私がさきに食べて、そのあとでおとどけ申しているような始末であります。それにつけましても、如来聖人をはじめ、三世、十方に向ってお禮申すばかりであります。

松尾芭蕉翁が当地の熱田での句に

いざさらば 雪見にころぶところまで
とあります、枯草にかかる露のいのち、ことに老いて病弱の私には、いつころびますことやらわかりませんけれど、力の限り続けさせて頂きます故、この上ともに御信交

をいただきますように、年頭にお願い申上げます。
さて眼を外に向けます時、明治以来十年毎に戦争してきました日本が、三十余年、干戈を交じえることなしにまいりましたが、暗雲は日本を取りまき、国内は敗戦以来、借り物の民々義を着て、内容は空洞化し、人それぞれの思惑だけでの日暮しを続けて有様であります。
歎異抄の末文に「如來の御恩ということをは沙汰なくしてわれも人もよしあしとのみ申しあえり」とありますが、夫々の自我を主張して、絶対智、不滅の眞実をよそにした生活には光明がありませぬ、はてしのない苦海がその定めであります。親鸞聖人が、教行信証の総序に
「穢を捨て淨をねがい、行に迷い信に惑い、心くらくさとりすくなく、悪重く障り多きもの、ことに如來の發遣をあうき、必ず最勝の直道に帰して専らこの行につかえ、唯この信をあがめよ」
ことに、必ず、専ら、唯と四度くりかえされて信を勧めて下さるお心が身にしむ年頭であります。

四 海 兄 弟 と 同 一 念 仏

近 角 常 観

曇鸞大師曰く「夫れ遠く通ずるに四海の内皆兄弟と為す、同一心念佛して別の道なきが故に」と。

四海兄弟の真意義は、如來の本願には善惡を簡ばず、貴賤を論ぜず、男女老少を謂わず、古今東西を分かたず、唯選択本願の念佛をもって同一に救濟せんとのたまえる大宝海に帰入して念佛成仏するにある。

世界主義とか、平等主義とか云うことは唯漫然として人類なるが故にとか、万物同根なるが故にとかいうようなことでは根拠がない。單に人種の異同を問わずとか、国土の別を見ずとか、言葉、風俗の差別を認めずとかいうは、唯偏見を拂うばかりで中心を見出すことができぬ。

四海兄弟の真意義は、十方衆生と呼びたまえる如來の本願の下に、善人も其善の功を認めず、惡人も其惡を懺悔し、如何なる修行もその自力をなげうち、如何なる逆説もその邪見をひるがえし、有學、無學を認めず、有罪無罪を問わず、学があつて何等の力もなく、罪また飽くまで恵まれて、十方衆生ただ如來の本願の下に、同一念佛せんとす

る、これ即ち四海兄弟の一味に入るのである。四河海に入りて一味となるが如く、四姓の者、釈と称して同一仏子となるのである。これが仏教の根本義である。しかし仏教は單に四姓の別を見ずといふだけの人間主義ではない、同一涅槃の醍醐味をあじあわねばならぬ。これを正信偈に「能く一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖も逆説もひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し」と示されている。

親鸞聖人は法然上人の選択本願の念佛を歎じて曰く「明らかに知んぬ、これ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名づくるなり、大小の聖人、重軽の惡人、みな同じくひとしく、選択の大宝海に帰して念佛成仏すべし」と。

實に如來の本願の前には、大小の聖人もその自力修行の功を認めざるのみならず、全くこれをひるがえして唯弘誓の力を認むるのみである。和讃にも

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら

如來の弘誓に乗ずなり

と、如何なる竜樹、天親の大士といえども如來の本願弘誓の前には自力の心行をなげうて、唯大慈大悲を仰ぐばかりである。

歎異抄にこれを「自力作善の人は、ひとえに他力をたのむこころかげたるあいだ、弥陀の本願にあらず、然れども自力の心をひるがえして他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり」とある。大悲のお恵みの前には大小の聖人もその善を認むるあたわず、善凡夫も、世間的諸善もその光を消されるのである。歎仏偈には「如來の光顔巍々として威神極りなき前には、日・月・摩尼の珠光のかがやきも、皆ことごとく隠蔽され、なおし聚墨の如し」であると述べられている。

「善人なおもて往生を遂ぐ」と歎異抄にあるのは、善人がその善が間にあうて往生を遂げるのではない、その善をひるがえして、たお慈悲ばかりで往生を遂げるのである。

唯念佛ばかりで往生を遂げるのではなく、その善をひるがえして、たお慈悲ばかりで往生を遂げるのである。聖人であろうが、善人であろうが、如來の本願は専修専念である。自力作善が間に合うくらいならば、選択本願はいらぬのである、念佛成仏は不要である。故に如何なる聖道も權倖である、如何なる万行諸善も仏門である、和讃に、

像法のときの智人も

自力の諸教をさしおきて

時機相応の法なれば

念佛門にぞりたまう

竜樹大士もその本意は南無阿彌陀仏である。天親菩薩も

その自督は、帰命尽十方無碍光如來である。

恒沙塵数の如來は、万行の少善きらい一つ

名号不思議の信心を、ひとしくひとえに勧めしむ。

十方恒沙の諸仏の証誠護念のみことにて

自力の大菩提心のかなわぬほどはしりぬべし。

實に三世の諸の如來、出世の正しき本意は唯阿彌陀の不可思議を説かんとの思召しである。これ悲願の一乗である、悲願の外に二乘三乘を認めぬのである。二乘三乘は悲願の一乗に入らしめるためである。この悲願こそ實に第一義乗である、誓願一仏乗である、本願円頓一乗である、

聖道權倂の方便に衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗帰命せよ

と仰せられたのが絶対不二の如來の本願の教たる所以である。

親の前には如何なる善き子も自ら誇りとすることはない。如何に親孝行の子も親に対しても其孝を誇り得る者はない。又親が子を憐むにその孝たると否とにかかる事はない。否、親に対しても孝をなせりと思う者があれば根本に誤っている。如何なる孝子も自己の孝たりと思ひ心あらば、これをひるがえして親の大慈大悲に感泣すべきである。古のいわゆる善なおとらず況んや悪をやである。善すらなお何等の效を認めぬのである況んや悪を以て防げとなさんや。孝

子すら親の前には其孝を廻えして大慈大悲を仰ぐ、況んや不孝の輩、その不孝を廻えして大慈大悲を仰がざるべき。孝子すら親はこれを憐愍して其孝の功を認めず、況んや不孝の子に対してもしばらくも眼を放つべけんや、不孝なだけ余計に捨てることは出来ぬのである。親鸞聖人曰く、如何に況んや十方群生海、この行信に帰命し奉れば攝取して捨てたまわず、故に阿彌陀と名づけ奉る、これを他力と曰うと。又曰く、願海は二乗雜善の中下の死骸を宿さず如何に況んや人天の虛偽邪偽の善業、雜毒雜心の屍骸を宿さんやと。

即ち三乗の善人すら其善を止(とど)めず、況んや愚癡の凡夫の惡を輒ぜざるべき。これ歎異抄に、善人なおもて往生を遂ぐ況んや悪人をやと宣う所以である。

選択集には、選択の本願は本凡夫のためにしてかねて聖人のためなりと仰せられた。正信偈には、本師源空仏教に明らかにして、善惡の凡夫人を憐愍すといわれ、一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すればとあり、善というも惡というも、結局そらごと、たわごとの煩惱具足、火宅無常の凡愚である。しかしながらその有漏の善をたのみにして居るも、惡を悲しめるも同様に憐みたまうのである。善導独り仏の正意を明らかにし、定散と逆惡を矜哀すと

宣うもこれである。されど善凡夫すら憐愍したまうのであるから惡凡夫は最も悲哀したまうのである。極惡最下の衆生のために極善最上の法を説き給うのである。實に惡人正機の本願他力の意趣を頂かねばならぬ。

如來会に曰く、彼國の衆生もしまさに生れん者は皆ごとく無上菩提を究竟し、涅槃の處に到らしめん、何を以ての故に、若し邪定聚および不定聚は彼の因を建立せることを了知すること能わざるが故にと。これ實に惡人正機の真髓である。歎異抄には、煩惱具足の我等は何れの行にても生死を離ることあるべからざるを憐みたまいて願をおこし給う本意、惡人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なりと、これ實に彼の因を建立したまえる本意である。この御本意を了知すること能わざる故に。即ち仮智不思議を信ぜざる故に、我等の善きを善しとして邪定聚、不定聚の機となるのである。

歎異抄十三章に一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我こころのよくて殺さぬにはあらず、又害せじと思うとも百人千人を殺すこともあるべし、と仰せの候いしは、我等が心のよきをばよしと思い、あしきをばあしと思ひて本願の不思議にてたすけ給うということを知らざることを仰せの候いしなり、とあるが、自分の作る善惡に目がついて、惡業煩惱の我等を助け給う本願の正意を頂か

ぬことを戒められたのである。宿業の如何によつて為す、
為さぬ差こそあれ、實に罪惡深重、煩惱熾盛の我等、かく
の如き貴劫已來常没常流転にして出離の縁あることなき者
を助けんとの本願不思議を仰ぎ信するの外はない、これ実
に機法二種の深信である、正定聚の機である。極惡深重の
衆生の大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を蒙るのである。

一寸聞くと善惡を簡ばずといふことと、悪人正機といふ
事と、何んとやらん意味の異なる様な点があるらしく感ずる
ことがある。これは善惡を簡ばすということを善くても、
悪くてもよいと云う事と思い、悪人正機ということを悪
人程一層よいといふことに誤解するからである。
善惡を簡ばずといふは所謂、我等が心の善きを善しと思
い、悪しきを悪しと思うて居る心をひるがえして、如來の
御思召を頂くのが肝要である。その如來の御心といふは、
我等は實に善といふも皆そらごとたわごとにて
極重惡人、凡愚底下的者なるを、飽くまで見捨てたまわ
ざる誓願の不思議である。この不思議を信じたてまつるの
が往生の正因である、即ち惡人正機である。歎異抄一章の
弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、ただ信心を要
とすと知るべし、そのゆえは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をた
すけんがための願にてまします、とあるのがここである。
和讃には

き善なきゆえに、惡をもおそるべからず、弥陀の本願を
さまたぐる程の惡なきゆえに、
全体善くても可い、悪くても可いと云う言葉が、なお善く
も悪くとも思ひにまかせて出来るとの思いが本になつてあ
る。全体これが間違いである。惡人程一層よいといふてな
お為すべき惡の余地がある様に思うて、極惡最下の者が
これ以上に為すべき惡があるものか。たとい身に行わぬ
からと云つて極惡最下と知らぬのが誤りである。我等は地
獄は必定すみかである、善くても可いとか、善くせねばな
らぬといふは、全体我等が善く出来ると思ひて居るのが誤
りである。世間的に善いとしても、それを善として誇りと
して居るのが間違いである、また善をしようとすれば出来
るもの様に思ひて居るのが間違いである。我等如き極惡
最下の者を見捨てたまわぬ本願の親心をいたく善にくら
べて見れば善と名づけらるべき善はないのである。

聖人の最終の法語としての御述懷和讃に

よしあしの文字をも知らぬ人はみな

まことのこころなりけるを

善惡の字しりがおほおそらこどのかたちなり

是非知らず、邪正もわからぬこの身にて

小慈小悲もなけれども名利に人師このむなり

これ實に聖人が如來の本願の前に、至心信樂おのれを忘れ

不思議の仏智を信ずるを、報土の因としたまえり
信心の正因うることは、
かたきがなかになお難し
とある。かく信する一念に、實に我身の罪惡を自覺して
今まで我身の善きをよしと思ひ、悪しきをあしと思ひたる
ことの間違つてしたことか分るのである。實に、
如來の御こころによしと思召すほどに知りとおしたらば
こそ、よきを知りたるにてもあらめ、如來のあしと思召
すほどに知りとおしたらばこそ悪しきを知りたるにあら
めど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのこと
みなもて、そらごと、たわごとまことあることなきに、
ただ念佛のみぞまことにておわします。
との仰せが實に聖人の御自督の極みである。
全体、善惡を簡ばずといふことを善くても悪くてもよ
いと思うものゆえ、邪見に陥れば惡人正機といふは惡人程
可いといふ様に誤解し、これを矯正しようとして、善くて
も悪くてもよけれど、成るべく善くせむばならぬと思う
て自力に陥るのである。
不思議の仏智を頂きてみれば、今まで善と誇っていた善
も善でなく、惡をおそれていたも惡と云うに足らず、眞の
惡は罪惡深重、煩惱熾盛の我等である、眞の善とはこの如
き罪惡を見捨てたまわざる本願である。ここに、
本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべ
たまいたるかたちである。實に如來の本願の前には、善も
なく惡もなく、貴賤僧俗を簡ばず、男女老少を謂わず、造
惡の多少を問はず、修行の久近を論せず、唯弥陀の誓願不
思議を信じたてまつりて念佛し奉るばかりである、實に念佛
成仏是真宗である、同一念佛して別の道無き故にである
聖人が、親鸞弟子一人も持たず、そのゆえは我はからい
て人に念佛申させ候ばこそ弟子にても候わぬ、ひとえに
弥陀の御催しにあずかりて念佛申せ候人をわが弟子と申す
こときわめたる荒涼のことなり、とあるも、皆如來の御弟子
なれば親鸞の弟子でないと、眞に己を空しくしたまうの
である。法然上人の信心も善信の信心も一となりと仰せら
れるのも同じく如來よりたまわるからである。したがつ
て、「ただ念佛して弥陀にたすけられまいかすべし」との
法然上人の仰せが、形を見れば法然上人、言葉を聞けば弥
陀の直説である。「如來の教法を十方衆生にとききかしむ
る時は、唯如來の御代官を申しつるばかりなり」との謙虛
なお態度が、知らず識らずの間に我等がためには眞に如來
の化現として渴仰し奉る次第である。

本尊、聖教は如來の流通物なれば少しも自専したまわぬ
のである。その代り一切の生きとし生けるものはみな十方
衆生の中であるから、如來の大悲を蒙れかしと思召すので

ある。たとい食膳にあがる魚鳥を見てさえ、せめて三世諸

仏の解脱の憧相である袈裟を着して御縁を空しくせぬ様にとの深き思召しである。

こうした広大無辺な如來の御親心を頂き、同一念仏に入

る時真の兄弟の名乗りが出来る、大悲の招喚の声がとどい

た時、同一醜味に入った時に始めて名乗れるのである。

故に過去を顧みては遠く宿縁を慶び、未来を望んでは、

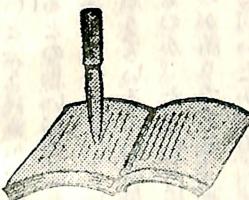
一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり、いずれもい

ずれも、この順次の生に仏になりて助け候うべきなりと、

三世に通じ、十方を貫きてあらゆる衆生、大悲招喚の下に

唯南無阿弥陀仏と、眞の同朋、眞の兄弟を名乗るべきであ

る。



「金葉集」に鳥を読める權僧正陽円の歌に

聞くたびに珍らしければほととぎす

いつも初音のここちこそすれ

これが、人の能く覚えている歌なれども、名歌じや。御法義の聴聞もそうじや。一つことを聞くたびに珍らしい。たのも一念で凡夫が仏になると云うほど、まあ珍らしいことは無いによりて、幾度聴聞してもこれが珍らしい。幾度もくこれを尋ねて聴聞せねばならぬ。

○
當流の御教化は、いつも珍らしからぬことばかりかと云うに、そうではない。このいつも変らぬところが則ち珍らしい御教化なり。たのも一念で凡夫が仏になると云うほど、まあ珍らしいことは無いによりて、幾度聴聞してもこれが珍らしい。幾度もくこれを尋ねて聴聞せねばならぬ。

聖道門の知識は博学多才の知識なりとも、我等がための知識とは云えず。淨土真宗の眞の知識というは、我等がために、他力信心のいわれをすぐ伝えたまうが、有縁の大善知識なり。

新 春 の 所

感

柳瀬留治

あらたま年の始である。誰しも新しい心になり、折目正しい晴着で年をことほぎ、若水を汲み、初日の出、初詣とすべて新鮮さをこいねごう。縁起は別として、新しいということ、新鮮ということは願わしいことである。

それは單に外的な形の上だけでなく、内的に心がフレッシュであることが最も大切であり、嬉しいことである。特に詩や歌を志す者は心の生きているところが生命である。

年をとるにつれ、自然に世ぞれがし、世俗の垢がつき、又面の皮が厚くなり、こけらが生えて、ものに動じなくなり、するくもなる。

新年を機に、生綿の如くぬめの如き純な、うぶな心になりたいものである。歌は新鮮なうぶなこころになりたいものである。歌は新鮮なうぶな心から生れるものである。新鮮な事象に触れて敏感さを失い、それが慢性になる。單に生理的感覺麻痺だけとなら別だが、良心の麻痺となり、

不道徳を犯しても心がとがめなくなるのは恐ろしい。歌は美の表現というが、美と共に、眞も善も統合され一体化された至極の体だからである。善に媚（こ）びると道歌めいて臭味を伴い、生命性の欠けたものになる。元来、道徳とか善とかを故意におこない、作爲的にすべきものでない。そしたものはこしらえ物で、偽善で、造花の如く香りがなく生命がなく無価値である。心にもないことをする、第一に空々しく恥かしくて嫌になる。

話がやや横道に入ったようだ。元にもどして結ばねばならない。先程、年と共に世間ぞれがし、こけらが生え、心がするくなるといった。誰もがそうなつて、どうにもうぶな心になれず、眞（ま）人間にもどれず、世を終る他にないであろうか。それだと詩とか歌とかいった純真なものを作れる資格がなくなる。のみならず人間として生きる資格をも失うことになる。実にさみしいことである。

実は私もかつて、そしたさみしい心になり、生きるに生

きられず、かく心の闇黒なまでは死んでも解決せず、進退きわまつて悩んだ。そうした己の重荷を憐み、引受けて下さる念佛に遭い、何とかたじげないことがと泣くのであつた。ここに永く背負つていた殻が破れて身が軽くなり、台風のあとのように心が晴ればれとさせていただいた。

歎異抄の十六章

「悪からんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし。すべてよろずのことにつけて、往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることを常に思いいだしまいらすべし。しかば念佛もまうされそろう。これ自然なり云々」

のお言葉にみちびかれ、初一念にたちもどつては、今日まで生きてきた。

人間は殻に閉じこもつて苦しむ。それが救われ、殻が破れてはじめてフレッシュな生命がよみがえり、うぶな新鮮な生命に立ちもどることが出来るのである。

私には殻の破れた時、念佛がもれ、歌がうまれる。殻が破れるとそこからうぶな心がうまれるのだと思う。

(短歌草原 四十八巻一月号)

歎異抄のすすめ（一）

田 村 実 造

福沢諭吉の「学問のすすめ」にならつて「歎異抄のすすめ」と題してみました。その題名のように、これは歎異抄の味読ではありません。今はむかしのわたくしのように、なんとはなしに道を求めている若い人びとを対象に書きつづってみました。この主旨で、これから歎異抄の条々について述べみたいと思います。はたして終りまで筆がつづくかどうか、我ながらおぼつかないのでですが、ともかくわたくしなりに日ごろの考え方、この「慈光」誌上をかりて書きつづらせていただくことにしました。

さて歎異抄といえば、多くの人には親鸞聖人の著書であるかのように考えられるがちですが、実はこの書は聖人の弟子の唯円房が、聖人口伝の絶対他力の真信を書きしるした書なのです。それはちょうど論語が、孔子の教えを弟子たちが伝説して書きしるしたものに似ています。もつとも、歎異抄の著書については、唯円房のほかに如信上人（聖人の長子善鸞の息）だという説もありますが、いま

臼杵の磨崖仏
み仮のん慈（いつく）しみ伝えんと
古へ人が岩に彫りしかも

並（な）み立たすみ仮の中の崩ゑけるが
見るに忍びず眼を伏せて過ぐ
蓮城が遙か唐より渡り来て
かくも仮の慈眼のこせし

神もまさぬ太古に阿蘇が噴ける灰
降りて積りてなせし岩層

凝灰岩壁たくみに鑿（のみ）に彫られける
おん顔（かんばせ）や心ほれぼれす
末世の我は 遙かに謝さむ

信厚き真名（まなな）の長者よ蓮城よ
末の世に生れし諸人仰げよと彫りしみ像の
優しくもあるか尊くもあるか

は常陸（ひだち）の河原田の唯円房だ、という意見にほぼ定着しているようです。では唯円房はどのような目的でこの書をしるしたのでしょうか。この書の冒頭の序に先師から口伝えにおききした真（まこと）の信心が、のちしだいに異義が生じて誤解されてしまうことをおそれ、信心が異なることのないように同心（同信）者の不審を正さんために書きしるした。

とか、あるいはまた本書最後の第十八条の終末に一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくなく筆をそめて、これをしるす。名づけて歎異抄といふべし。外見あるべからず
などとあるように、のちのち異安心がおこるのをおそれ書いて書きのこしたもののです。

なお歎異抄の内容については、すでに充分承知の方があるかと思いますが、なかには、あるいはご存知ないかたもあるかと思い、念のためかんたんに申しそえますと、この書は十八条（章あるいは節）から成る小冊子ですが、簡潔

でリアルな叙述は、どのような大文章にも劣らないでしょう。しかもその簡潔ななかに聖人の真信、絶対他力の真髓がありますところなく吐露されていますが、全条を仔細（しかし）によると、第一条から第九条までは直接法的な書きかたで、たとえば「親鸞におきては、ただ念佛して」（第二条）とか、「親鸞は父母奉養のためとて」（第五条）とか、「親鸞もこの不審あり、るに」（第九条）とかあって、聖人のことばが、カッコにくくられているかのような語法で語られており、また条条の最後はかならず「……と云々」と結ばれている。ところが第十条以下は間接法的で、「聖人は……とおほせさふらひき」（第十二条）とか、「故聖人のおほせには」（第十二、十三、十五条）とか、あるいは「聖人のつねのおほせには」（後文）など聖人からの口伝（聴聞）の書式をとっているのは、注意すべきことかと思います。

それから歎異抄は行文がいわゆる中古文で、かつ仏教語が多いのですから、若いかたがたには、あるいは難解でしょうが、しかしこれを現代語一一口語に訳すと、その力強い文章がすっかり去勢されてしましますから、みなさんは口訳でいちおう行文の大要を理解したうえで、やはり原文の簡潔でリアルな叙述に接し、そこに流れる聖人の真信に徹するよう心がけてもらいたいものです。

が口をついて出ることがあります。突飛でわがままな読みかたですが、これがわたくしの歎異抄の挿誦のしかたです

一、歎異抄との出会い

よくいわれることですが、わたくしもがこの人生で、人々にしろ書物にしろ、それとめぐり会うことは、よくよくの因縁があればこそで、それだけにおろそかにできないものと思います。わたくしにとって歎異抄との出会いは、教行信証にも「たまたま行信をえは遠く宿縁をよろこべ」とあるように、遠い不可思議の宿縁であり、こうしてペンをとりながらも、その宿縁の有難さがほのぼのと心にひろがってくる想いです。

それはすでに五十余年もむかしの想い出になります。田舎の中学校を出ていきなり遠い南の国、鹿児島の第七高等学校へ遊学することになりました。中学時代は厳しい規則づくめの学生生活を強いられてきた若者には、自治と自由をさけび、意氣と感激にもえる旧制高校生の生活はあこがれのまどでした。解き放たれた小鳥のように心を有頂天にしてしまって、またたく間に一学期も過ぎ夏休みも終り、秋になつてどうやら心の落ちつきをとりもどしてくるにつれ、家郷をはなれての生活は感受性の強い年ごろの遊子の

心に、なぜか知ら空虚さを感じさせるものがありました。逝く秋のせいもあつたかも知れません。

ちようどそのころです。寮の同室の友人に誘われ、なにとなしに仏教青年会の輪読会に出てみました。火曜日か金曜日の夜のことと、場所は西本願寺の鹿児島別院の一室でした。テキストは歎異抄でしたが、四月からはじまっていました。それまでは仏教には全くといってよいほど無知であったわたくしには、もちろん歎異抄がどのような書なのか、わからうはずはありません。そして歎異抄のどの章を輪読していたのかも記憶がありませんが、そのときは若い理知的なお坊さんの講師の口をついて出る、親鸞とか淨土とか念佛とかのことばが断片的に耳底をかすめるほかは何もわかりませんでした。

わからぬままに講読はうわの空でひとり冒頭からページをめぐっていると、ふと「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」云々の一句が射るように目にうつってきました。はて！おかしなことをいつている？これがわたくしの脳裡をかすめた最初の疑惑でした。なおも読みますむと、「しかるを、世のひとつにいはく、悪人なお往生す、いかにいはんや善人をや、と」。往生の一句はわからなかつたが、これは妙ないまわしだ、おもしろい表現だと自問

自答しながら、それからは講師や友人たちの声など聞こえない。つきつぎ読んでゆくほどに難解な仏教特有の語句や表現は多いが、なにか心をつかんで、ぐいぐいと引きこんでゆく魅力（みりき）にとらわれてしまった。歎異抄がいま青年の心をつかむのは、このような逆説的表現や力強く簡潔でリアルな行文であろうと思います。

寮に帰って床についても、なんだか高ぶった心は容易に寝つかれませんでした。翌日友人に、この書の解説書のようなものはないかどうか尋ねたところ、さっそく紹介してくれたのが暁鳥敏（あけがらすはや）師の『歎異抄講話』であった。学校の図書館にもあったが、乏しい財布のなかから苦面して古本屋から一本を購い、むさぼるように読んだ記憶はまだ生きしい。くりかえし再読したが、はじめて接した仏教書のことでもあり、一とおりは判つても充分な得心はゆかず、念佛がほんとうに体験できるには「善き人」（善知識・体験者）が大切なことが判つたことにとどまつた。いまにしてふりかえれば、わたくしが最初に出会つた仏教書が経典の類ではなくて歎異抄であつたことは幸せでした。もし経典の輪読であつたならば、求道というよりも教義の詮索（せんさく）などの方向へ走つていたかも知れなかつたと思います。

ともかく、こうして歎異抄とわたくしとの出会いがはじ

まつたのです。大正十二年の秋のことでした。この年の秋、われわれの七高佛教青年会が恒例によつて公開佛教講演会を開くにあたり招請した講師がたまたま暁鳥師（すゑひのしげ）です。に夏休み前から決つていていたのですが、わたくしには全く予期しない喜びでした。そのようなことで暁鳥敏師が、わたくしには最初の善知識であつたといえます。なお歎異抄のほんとうの味わいかたを教えてもらったのは池山栄吉先生でした。それは、その後鹿児島から京都に上洛して池山先生の講話を聴聞したり、その著『信を行く旅人』『絶対他力の信仰』などの書を読むことができてからのことでした。



生 命 追 求 へ の 遊 び

——私の京大学生時代——

川 畑 愛 義

いような心情的事件もひき続き起つてゐた。

京大医学部へ入学してから、しばらくの間の虚無的な時代を過ぎようとして私はまた生死の問題に悩まされた。そして今から考えると時代の錯誤のように思われるかもしれないけれど、当時の学生にとってみれば、それほど不思議ではなかつた武士道精神の体得へ志向していつた。

私は鹿児島生れで、そのころ、かつての藩守島津公が育英的な趣旨のもとに設営していた「三州学舎」に入塾したのも自然の成りゆきともいえよう。これは旧藩守が、薩摩、大隅、日向の子弟を武士道的精神によつて鍛磨することを目標としたものだつた。

当時、学舎のあつた北白河の近郊はまだ田園が大半で、野鳥やカエルなどの楽園のようなものであつたことを記憶している。しかし私はどうてい真剣な意味で舎の基本理念にそつて武士道的鍛成への歩みにはげむことができなかつた。葉隱聞書の

「毎朝、毎夕、改めては死に死に、常になりて居る時は……」

名文のしらべとして口に誦むことができても実感をもつて死と対決することは私にはかなり無理でもあつたし、困難でもあつた。

羽溪先生との出会い

しばらくたつてから、私は京大の仏教学の主任教授であつた羽溪了諦博士の司宰する知四明寮にお世話になることになった。生命の実相を究め、死からの脱却をはかるためには、宗教、特に仏教が身近に感ぜられたからでもあつた。年少の頃からおぼろげながら大乗仏教の宗教哲学の深遠さに魅かれていたし、悪人正機、無碍の一徳とかいう親鸞とその教法に親しみを感じていたからにちがいない。

この寮では朝夕の真宗的勤行や自由な空氣が当時の私の生活や思想にもある程度相応していたように思う。私たち寮生は毎日の宗教的お勤めのほか、羽溪先生の温厚な人間性に接しながら何となしに求道的な精神に包容されていたようと思う。

このように語つていると、私もひとかどの学道深求の青年のイメージを持たれるかもしねれないが、決してそうでは

なかつたことを告白しなくてはならない。云つてみれば寮内の不良生組で、時に寮則をおかし、時に寮師にもたてをつき、寮内の真摯の空氣を乱したことも少なからずあつたことを覚えている。当時をふり返つてみると、寮生たちにはまじめな勉強家がそろつていたし、聞法の雰囲気は寮内に支配的であった。

同寮生の西元宗助氏の談によれば、この寮の卒業生の中からは勧学三名、大学教授十七名、大臣、重役、住職、その他地味な在家の篤信者たちが数多く育つたといふ。そのうち寮にもちよつとした異変が起つた。というのは当時まだ京大文学部哲学科の学生であった花田正夫となる男が現われて、高らかに念佛を唱え、いかなる凡夫、悪人も生命の全面的救済にあずかることができる力説したからである。その情熱的な宗教の体験は静肅をむねとした寮生たちにただならぬショックやストレスを与えたようであつた。

さすが鈍感な私も、死線を越える法悦の奇跡をみかけたような感銘を受け、それから彼や、京都府下の僻村の寺の住職、横田慶哉師らについて比較的まじめに仏法を聞くようになった。そして自分もまた現実につきまとう苦惱を身に持ちながら永遠の救済にあずかりたいものと虫のいい焦慮の念にかられた。

も、どうすることもできないあわれな孤独の自分を見出すようになり、ようやく親鸞の声が身近に聞けるようになつたからである。

「よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなし」

これは仏法の根本理念である「一切是空」、「万象流转」の真義を深刻な体験を通して端的に述懐したものであつたようと思われる。ようやくここに自らの生命の追求として信仰への歩みをはげまそうとするとき、信仰の本義はますます暗く、無明の影はいよいよ濃くなり、不可解の断崖は果てもなく深くなるばかりであった。最後に私の面前に横たわつたものはまぎれもなく唯一の「絶望」という虚空であつた。ヘルマン・ヘッセは「神が人に絶望を与えるのは、その人を殺すためではなくて、新しい命を呼び起こすためである」と云つたが、私には絶望は依然絶望であり、その他の何ものでもなかつた。しかしだ、ここに、この恐るべき絶望によつて自分の無力・無能・無知がいやというほど知らされるようになるにつけ、しだいに我執がうすくなり、私にも仏法を聞く姿勢が出来るようになつたのである。

こうした若い求道の情熱のうずまきの中にあつて、私も次第に仏縁が熟していくことになる。というのは私が道を求める、信を得ようと焦るほど、死ぬことも、生きること

章を心読することが出来、親鸞の声をじかに聞く体験を持つのである。

ついに私はある夜、更けていく静寂の中で歎異抄、第二章を心読することが出来、親鸞の声をじかに聞く体験を持つのである。

つことができた。これは相対自力を越えた絶対他力の大慈悲心によるものと感銘した。不思議なことにこのような経験をもってから、自力宗、すなわち禅宗の經典までほとんど何らの抵抗なしに読めるようになつた。

久松・西田先生との出会い

それからまもなく私たちは禪宗の本山「妙心寺」の一角にひつそりと建つてはいた如是院（今の花園会館はそのあと）に移り住むよくなつた。ここからあまり遠くない同じ妙心寺境内の中に春光院があり、当時まだ若かった久松真一先生がただ一人そこで清らかに行ないすましておられた。たしか先生は当時まだ京大の講師であられたと思うのだが、その風格はまさに春の光の輝くばかりのものがあつた。私どもの他力宗から見れば自力の禪宗はその意味では異教であるはずなのに先生と対坐していると一言の説教を聞かなくてほのぼのとした慈容は何となしに時間の悠久性というようなものを感じた。

特に先生のすすめられる一服のお茶は全く無造作に差し出されるのであらうが、そこはかとなき天地宇宙の静けさがこもり、円融の法宴が開かれる思いさせした。先生から聞いたお話しはそれほど少なくないけれども、あの狭い庵

室の中でうけたお茶の饗應は今なお鮮明なものがある。ついでながら先生の旧い名著「東洋的無」が発刊されたのはそれからずつと後のことである。私は北支蒙古の奥の僻地踏査の旅に出たとき、ただこの書一冊をたずさえて困窮と孤独に堪えられたことを思い起す。

春光院の庵室にうかがつてゐる頃、ときどき普通よりやや背の高い、やせ型の、強い近眼鏡をかけた、少し厳しいような風貌の客人をみかけた。この人が久松先生の恩師である西田幾太郎先生であることがわかつた。私たちの目からも久松先生が特にいんぎんにこの先生につかえられるよう見うけられた。

この何となしに不愛想で冷たい感じのする西田先生には最初近づき難いものを感じたが、久松先生を通じてやがて私たちにもわけわからず西田哲学に魅かれるようになつた。まず最初に読み始めた「善の研究」は哲学書とはいっても宗教に極めて近い哲理を一見わかりやすく書かれているので当時の学生達にも広く読まれていたようと思う。

私は興味の少ない医学部の教室をぬけ出してはたびたび西田先生の講義を聞くようになったが、他学部の学生として、いわば聽講資格もないのだからうしろの方で小さくなつて先生の声に耳を傾けようとしたものだつた。しかし不法聽講者は単に私ばかりではなかつた。理工系、文化系の

はらからぬ死に憶ふ

愛 義 詠

野をゆけば 家に帰れば おもかげの まぶたに見ゆる

いとけなき日よ

いかばかり 辛くありけん 若妻に 憶みもつ子ら 後

を托して

明日といふ 日のあるものを ひとたびの声きかせてよ

風のなかより

ほとほとに 消ぬべき人だも 永らえて わが弟は 死

にはてにけり

恙なく今日も暮れゆく 比叡山に夕映淡く うつるふみ

れば

東山 大谷廟のほとりなり おくつきどろろ 定めける

はらからぬ えにし喜ばん み仮の 悲願のなかに生き
にけるかも

（一九六一年六月）



念

仏

詩

抄

木村無相

わたしは

親じやげな——

和上おおせに
無仏世界

鬼界が島も
ヨソにあるではない
このわたしのムネの中

ばつかり

鬼を生む
親とてほかに
なかりけり
よくよくみれば
わがこころかな
えわたしのこころは
人で無仏の世界
わたしは鬼の

和上おおせに

“ただ助けられるばっかり

それゆえ

助かりたいがいらず

成ろうがいらず

墮ちまいがいらず

仕上げることがいらず

ただ実言のおおせを

仰ぐばっかり——”

“人に用いられ

尊とまれ

売り屋になり人

聞かせ屋になつて

懈慢（けまん）界に

墮ちてしまふ——”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

呼びづめ

— 20 —

実言のおおせ
ナムアミダブツ
ただみ名一つを
いただくばかり
ただみ名一つを
仰ぐばかり——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

呼

呼びづめ

和上おおせに
“終りをつつしむ
といふことが大事じや
若い時から出離に
心がけた者が
晩年に妙な者に
なる者が
すくなくない——”

和上おおせに
“和上おおせに
終りをつつしむ
といふことが大事じや
若い時から出離に
心がけた者が
晩年に妙な者に
なる者が
すくなくない——”

弥陀はまねきづめ
思いづめ待ちづめ——

待ちかねさせられて

呼ばわせらるる

ナムアミダブツ

呼ばわせらるる

今も呼びづめ

ナムアミダブツ

親鸞聖人と今一人の私

私の青年の頃、歎異鈔を読んで聖人のお心の片鱗にふれ、爾來忘れ得ぬ人となり、或は旧蹟、真筆、真影、著書、等々をたずね、そこに大なり小なり聖人の徳香に接し得たけれど、よそ人のもどかしさから出られなかつた。

そうした頃、恩師から、聖人にお遭いするには、眼を外に向けては駄目で、私共の煩惱の中とお聞きし、眼を内に向けはじめた。すると「さるべき業縁のもようせばいかなる振舞もすべし」と仰言る聖人は、何時でも、何處でも、また何をしていようとも私と御一緒して下さるのに驚いた。念佛がしみじみと喜べるにつけ「人居で喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」と。喜ぶ心もなく、淨土に急ぎまいりたい心も

おこらぬにつけ「親鸞もこの不審ありつるに、同じこころにてありけり」と。病苦身にせまる時「名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力なくして終る時彼の土へはまいるべ

観無量寿經に「如來はこれ法界の身なり、一切衆生の心想中に入る」とあるが、親鸞聖人はその願心を「親鸞一人がためなりけり」と感佩されているまま、私共の煩惱身

十月八日、未明。

法信抄

念佛申さるにつけても思い浮かぶのは、光触寺師のつぎのお言葉であります。

「御當流において称うる念佛は本願海より流れ来る念佛である。この念佛は御用なくして出て来たのではない大いなる仕事をせんがために出て来たのである。

如何なる御仕事かと言えは凡夫の往生定めにや帰らぬということである」

と。そぞろに聖人の、本願名号正定業、のお言葉が思い浮かぶことあります。これは如来様の大仕事と在じます。

隨

感

隨

想

花田正夫

きなり」と。

わが身の罪障の重きにつけ「悪をも恐るべからず、本願をさまたぐる程の惡なきが故に」と。私共の小慈小悲の末通らぬにつけ「今生いかにいとおし不憫とおもうとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」等々、いつも私共の内に同座して呼びかけて下さるのである。

それにつけても、ヘレンケラ女史は「盲目で聾で啞の私は、外からの教師は無用である。なくつてはならぬのは、今一人の私である」と、家庭教師の、アン・サリバン女史の献身の労を謝している。さて、智慧の目も、行の足もな私になくなつてはならぬ、今一人の私と現れて下さる方が聖人である。ここまでおいでのお教えでは、この身の器量ではついて行かれぬけれど、ここまで来て下さるお方がなくてはならぬ。

の中に同座して下さるのである。それだから、私共が飛ばうが跳ねようが、どうしようが、こうしようが、聖人のいろいろいふところからはみ出ることは出来ない。弥陀仏の攝取不捨の誓願のたのもしさを、御身にかけておとどけ下さるのである。

(信道、昭和五二年十一月号記載)

おとしと も し び

災難にあう時節には災難にあうがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがる妙法にて候。

(良寛師・書翰)

大地震の見舞いに答えた良寛さんの書信で、業道に隨順して超越する妙趣を知らされる。私共はわが身かわいしから、身にもつ業をも、災難とか死となると極力逃げ回り、あげくの果てに、万策つきて力なくしておわる哀れな存在である。

ハンセン氏病患者の北条民雄著の「いのちの初夜」にこう語っている。病になつてからたびたび自殺をはかったがそれが出来ず、全生園入りを決心した。ところが、自分より重くなつた患者が多いにつけて絶望して、その夜病室を抜け出して自殺をはかつたが、矢張り駄目で、悄然と病室に帰ると、古参の患者の当番さんが、

これは良寛さん的心に通じる。顔についた墨ならぬぐうことが出来るが、身にもつ業はどんなやな病も死も逃れようはない。その瀬戸際に立つと、何一つ力にならない。この身に唯一つの力となつて下さるものは、生死を解脱されていく仏さまお一人である。たとえば船旅で暴風雨にあうと、船客は動転するが、船長の確信ある舵さばきを見ると、自然に平静をとりもどすように、生死の大海上に浮沈する身も、生死を超えた仏さまに手をひかれまもられていやな業苦をもうけてそれを超えることが出来るのである。「生死の世界に仏ましまさば生死なし」である。

(昭和五二年十月、中日新聞記載)

無一物中無尽蔵 花有り月有り棲台有り

(禅の語録)

中国の譬話に、獵師が猿を捕える時、壺に胡桃(くるみ)をいれて山に置くと、欲深い猿が手を入れて胡桃を沢山握るので、壺から手が抜けなくなり、生け捕りにする、とある。

手が抜けないのは一杯握っているからである。すべての問題は問い合わせを正しく知れば、答えは自然に出てくる、問い合わせの中にちゃんと答えはある。そこには加えることも減じることもいらない、唯おのれを空しくして無数の問

「君は自殺しようとしたね。だがとめはしないよ。ここには死なうとして死にきれない者が入る所だよ。

死を選んでも、再び立ちあがれるものを内に蓄えている人は、自殺に失敗するね。意志の強い者には、この病気の絶望も大きいから、死ぬと安心すると思う心と、心臓がドキドキする矛盾の心の中にひそむものは何か。

どこまで行つても人生にはきっと抜け道があるとおもう、自分のいのちに謙虚にならう。

同情ほど愛情から遠いものはないね、僕が一体君に何を慰め得ようか。

新しい出発をしよう。それにはまず病になりきることだ。死を望んでも死にきれないという事実の前に屈伏したね。然し、まだこの病に屈伏出来ていない。早く屈伏して、ハンセン氏病患者の目を持つことだ。それは真剣勝負で果し合いと同じだ。

こうしてすっかりこの病者の生活を獲得する時、再び人間として生きかえり、新らしい人間がきずきあげられるもし病がすんで盲目になればなつたでまたきっと生きる道はあるはずだ。しかし苦惱は死ぬまでつきまとつくるだろう」と厳しく、やさしく教えられて、人間の眼まなこが開かれ、いのちの初夜を迎えた、とある。

いに直面し、無尽の答えを与えるばかりである。

若い時、不幸にも両手を切断せられた大石順教尼は、手の無いおかげで、小鳥が嘴(くちばし)一つで立派に子を育てているのに教えられて、筆を口にくわえて字を習い始めたと語っている。

東山魁夷画伯は、絵になる場所を探すという気持をすてて、ただ無心に眺めていると、相手の自然のほうから、私を描いてくれとささやきかけているように感じる風景に出合う。そこで私の足をとどめ、スケッチブックを開かせると述べている。

愚痴の法然、愚禿の親鸞と名告られた両聖人のおかげで日本の浄土教の美事な開華があつた。自分の智慧や善根を誇る人には、その人相応の小さく狭い路しか開けない。無我な人によつてはじめて十方にあまねく、三世を貫ぬく大道が現われ、古くならない新しさが隨時、随所に光沢を放つ。我のかたまりの私共は、襟を正して、唯よき人の仰せを頂ばかりである。

(昭和五二年十二月、中日新聞記載)

あとがき

ながら亡くなられました。

木村実相さんの念佛詩抄を頂きました

(一月一日は休講)
毎月第一、二、三日曜、午後一時半、

一道会例会。一道会館

地下鉄、新瑞橋下車。近鉄呼続下車

又は本笠寺下車、市バス乗りつき。

教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後。

昭和区小桜町二丁目四番地

市バス御器所通り一丁目下車

東入る三筋目左入る。

地下鉄御器所通り下車

修道会。毎月七日午後一時半、(但し

日曜を除く) 尾西市三条板倉蓮光寺

新一宮よりバス、尾張三条下車

今日ひと日 ひと日のいのち 冬晴るる
(無相)

○

定 價 半 年 七〇〇円 (送共)

一 年

一四〇〇円 (送共)

一

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人

花 田 正 夫

電 話 八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字畠谷

刷 人 坂 部 光 雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

慈 光 社

電 話 八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字畠谷

印 刷 所 坂 部 光 雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

慈 光 社

電 話 八二一局七〇三七番

慈 光 社

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○